土左日記考證

六

土佐日記考證下

十六日乳なるやまねを狩おりて所よとまれりたぐ
浦の定 深崎坊
海よ波なくしていつしらうさきといふ所をうちんとのぞ
定 定 定 定 定 定 定 定
なんおもふこのぞあるともよやむ屋くもりつゝあるい
人ぞこの波をうつをえてあるあらいさ
雫ぐみをねのうらぞといふなれど波の中
みをゆふぞあり名さて舟よのかし日ふるとうふ
まで定 定 定 定 定 定 定

万葉十

大礼零暁月夜級不解意居跡居
蓋物

公任集云あらきづくよはいとやうのものさまとて冥のあるさまとて月のいでぬるさまとまうしひとのくまひろれば云く
狩衣物語二下云あらきづく松のさやうなるようかきぬのいとうきまきまはげさといふものをきて云

漁隱叢話前集卷十九引今是堂手錄云高麗使過海有詩云水島孤懸還海壁斷復連時賈島詩為稍人聯下句云棹穿波底月舡壓水中天麗使嘉歎久之自此不復言詩云云

南海よりは雲ぞ中もおりたちぬ波の中よりはるのあるまうよりあまとも波の
あらきを雪よりなしてい出ぬ　十二月廿一日ありあけ月十六日のそれ
十二月小の月なるべしこのく日くよ日をこのそへ入るいとまをて風波よりこへ
られていづくよりはるをわるるようにつれくるさまあるつねとう来ぬ文
ふも見をこのそへこるる雪ふえ雪ちり
十七日ふるとれる雪ふれくたりてあるつきばくよい雪
おもしろくふしだ雪をいづくしてもぎこ田くこちあひざ
よ雪のうへも海乃そこもおれどどくよなんひ雪
くるうぐもむのうちをのうえさをいうぐつ波のうへ
月　棹　穿　波　上
月をふびはあそふうえのうちのそうをとそいひうえ
聞　去　妙　海　中　穿
きくさしたきるなのまくこある人のあるる　黄鶴

主注下一

古今秋上
ながめのそこの月のうへにあるこぐふね乃さおりなべて
なるべし定　扶葦
さつるもこのつくなるうんらをなげてある人のまくこのある
扶ナシ
このけれバ波のそこ月るひさこのそうらぎ
とろイ附
ふれぞわびしきこのくいふあひざよ乘ゆう
やくひけ田くよかがらとあらそうきこもおいろよいで
きぬ風　窟　さぬ屋しうあるこうしてんといひてこのへる
さわてん附　舟ふる定扶葦
このあひざよ月あり思いとまじ
あらきづくよは曉の月影　むりしをのこはくこは賈島をさきるれる
屋し例のおぐわうと名をはくでむうのをとはいへる　さをうぐつ波のうへの
月をふいおをふうるのそうをくこの句を原本文字あて棹穿波上月
舟襲海中天とかきれど今は諸本よりあて低名よあるうむさてこれ聯

旬八漁隠叢話より知れど文字つゞくかつゞくそは標注よりひけるをうたてあるべし　ゝゝさしにゝるなりゝこの全文ゝゝぐもいへるごとくもべて女よりなりそうれしうべかく漢土の故事などいへるはかりうなるかるゝごとゝこのうゝじゝそこはゝゝさしゝるゝとゝとゝれるゝゝこの文あや抄ともゝゝゝゝれよゝゝるゝとありてそれよつゝて秀秀真淵などの説もあれど信なるゝゝうなるべ今は為家卿の附注やなどゝゝゝゝしとあるゝゝゝゝゝむゝなゝゝこの文ゝこは水ようつれる月のうへゝりゝをさせば桙は藻などのさはゝゝゝゝんを月中の桂なゝんといへる月中の桂はゝりは標注よりあけうかけゝれば文ゝこのゝゝあきゝけゝ久ゝゝゝゝゝ

毎りよやあ〳〵人云〻真渕云んやの人見ひをやうう〳〵なくをいふ万葉ニ見ひを
やるとのふこれなり遺聞といふもこれ　いそぶりの云〻真渕云いそぶりハ
波のいそよあるをもてやうそいそぶりといひて波のうちとるを云〻おく
いそれつるごとくいそぶりハ波をいふなりさて一首の云〻磯によせる波を
よそる磯よハぬをもとる雪をみれりと云波を雪うり又なしく
ありこの雪をつもりうるをとりどりまぬ人のうなりを
まくこひとりよりの云〻
風よりる波のいそよりうるひをも素もえ〻〻思
花のうそをさくこのうこどもをきてしろしと云〻
舟のをさしるを拾を月日ごろの
とて附
よのめ

真渕云なるこのいをとてけるを万葉ニ
ちく浪のつをはがえとてけるを例也

源氏橋姫云をしごろよりぬ人の心をけ
うりるう人とをりをそちそをりのうえ
もてあそびとりをそまりのよりべ云〻
後拾遺雑二　清少納言
よをこうをそるれちく〻祓をたるうをと
あこありこうのせきへること
新勅撰春上　前林好忠
よきりのあなしのひはら春ろをを
花うゆきうとんをるゆ〻しく〻
日本霊異記中巻云貪ニ財
以呂志字類抄云耽ニ貪日断月
ちきを今本云ちよふる耽ひふくして
ゆのあごろをを久をえさるなをべしを云〻
尚書無逸云不聞小人之労惟耽樂之後
傳云過樂謂之耽

本字略云号の文字あまりまるは節奏の
なくひとそうちとなるはよたありて
あしくさこのはさらかををえをあまり
ても字ひはうしあしうぬをうをえをあまり
ゆをとうや歌林良材二条隆俊故
つうこのかうつあやあひをうつくあまの
いさもつさあ人也知をこそ地人とある
ハ句ごとの一字ずつあまりこれをも字と
ひをうしあきをるよ世をうをありてそ
ムさすとは結ず又為義美門の未来
記よ　ものれぬ人うもしとひおりを
てもまべきよあくむこそをもとをもをを
いのなりをるをとをうをぬ
仲の尊よりをきつくねへまいそ世
七字ちを也

たつなををあきう花をやをふくこをそ定ア
人ををるべ〻なるうちうこどもを人のなるをとをふ
をある人ハまこをこてふけ耽てりあるそ定ア
ナシ　定ア
又字をそもじあまを楽なもじ人を拾えあ〻ぐ
ものふ〻ものうなあり云のぬ〻いとりをきひのしく云〻
定ア　定ア
あつまびまを祓べどもえまねづどうけをともえをあへ
笑　定ア　定ア
ぐこをる屋し
いのりん　定ア
風よるまく風の波ををきうをもるいをやをを書もをしずをもをぬ色於
さくをを云〻波を花を又なしてあり　ふねのをさしるをきれく
こハ船中の主君とハ中よて紀氏ふうをとハをを又をを船長をハをを

今按ずるにたつなこをさこの雪花まへ乃
間よりかのをさこしるるおさなしあるを
附注本にはさをさしるるおさなしる義といるよ
りて思へばこれこそしるるこあるにはさの字
を脱せしものやとも思りへとたゞ　かりて
ありてかをへをあらうるむへくもわるねば
さてのきつてこそ　をよさをさ
義とあるるまあれば　たつあをのこそ　うた
紀氏の雲島がをらよなりてるる
よりやわるへんさるは賈島が棹宴波底
月相屋水中天と句の下をつけるりしも
高麗使のよくもあるぬ詩をとゆぶこのこと
をつくさまをゆしてもかどろうしめん
とそいつそりて消人となりてゐて句の下を
つけされば乃の高麗使をのうち詩をいそぎる
う須隠叢話よあるをうられよりて見ば
賈島が消人となりしぞとゆめの故を
雪よりえなを　花こえなを　この故をゆ
らんとそこりよりをうをさをさしるる
あるをれをいくれつるをさて乃よも先の
雪をかゆしをさるあるひをさあるいれく
ちく陽よりあせつて人をたつるとはいり又
うまをさをさしるる義よなりて雪
をあるんのこ雪てはたれも賈島が故
事とはあるましれバそよくくん
料まも又ものをとよたりあれば死
の日此事をことさらに賈島ゆるを
くれてるるそもゆるへ

いてれなんさぶめぶこしれど雪のぶんを見るよ紀氏ぶうの雪なる
歌　たつあをを　真淵ちるはさびるといふと人を欺くといへはば
ものに二そのうち一首は波を雪よりせつは一そは波を花よりなりてある
を引合せてよはあるをこの故ごとく姫の二そをうけて雪ち花の
とをいへるすあもと須のあをるるまうをく標注よ
ものにつをてをこはいやうやうとゆをまこはいやうやうとゆを　あけてはは真淵ふるる
をまをいふをきをあるきをいはをもをの雪ども
をあるをきをそれもふく思ひ人をありとゆをやをふるは眺の字を
すは標注よはしを　ををりあまりなりしぶ人をなえあをををふを雪は
をべて冊一字あるこのをそりあるあるとゆをもをぶりあるりのなをと冊七

字をへあれば人をれををへえををしてををを

和名抄形體部云指 和名由比 俗手指也 玄応音義

源氏宰相云ものびとりてとりかくしてなどかくるさまにはよりのびてもとどりてとりかくるまでうえ西方之

續日本紀第三十五云宝亀十年五月丙寅前学生安部朝臣仲麿在唐而亡家有偏乏葬礼有勅賜東絁一百疋綿三百屯

續日本後紀第五云承和三年五月戊申詔詞曰故留学問生贈従二位安部朝臣仲満大唐光禄大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈渤州大都督朝衡可贈正二品身涉鯨波業成麟角詞峯聳峻学海揚瀾顧位斯昇蓋已播如何不悲莫遂言帰唯有挽天之章長傳鄉地之聲追贈幽壤既隆於前命重叙崇班俾恪於令部云云

古今集目録云安部朝臣仲麿中務大輔正五位上兼守男霊亀三年八月廿日為遣唐学生留学生従四位上安部朝臣仲麿大唐光禄大夫散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈渤州大都督時年七十二

世日きのあれやうなるしば舟いでさんみれ人をうをへなげくらるしくうるもをなるれをたぐ日のへぬるこのぞをたみいくう世日三十日とこのぞつまてぞ あのびもいそこなそれぬべしいとをびをいを 孫ぞ 廿日乃

月いでよりも山にそもなくうす海の舟

安部の仲麿といひる人ハをろこーみるてうへるをさるはよふにのるをきあをてうれ園へうまのそれむをーをうれをそうこれかうこつり

などーるあうびやなりん世日の夜に月いづるまをそあるるその月ハ海ありぞいでるうれを

舊唐書列傳卷二百四十九上東夷傳云開元初又遣使來朝因請儒士授經詔門助教趙玄默就鴻臚寺教之乃遺玄默圖幅布以為求備之礼題云白亀元年調市人亦疑其偽此題所得 縑賚盡市文籍泛海而還其倫使朝臣仲満慕中国之風因留不去改姓名為朝衡仕歴左補闕儀王友衛尉卿開元十年授秘書監

籍放帰鄉 逗留不去 天宝十年又遣使貢上元中擢衡為左散騎常侍鎮南都護

王維集云送秘書晁監還日本詩云積水不可極安知滄海東九州何處遠萬里若乗海中風 傳看日帰帆但信風 蓬萬里映天黒 海東眼射波紅鄉國扶桑外主人邪島中別離久異域音信若為通

文苑英華卷二百九十六朝衡 衡命使本國詩云衡命将辭國非才忝侍臣天中寄明主海外憶慈親伏奏違金闕聊驂上津遥聚鄉陸遠悲不故園鄉西望懷恩日東帰感義辰平生一寶劍留贈結交人

又自信送日本国聘賀使晁臣衡東帰詩云上才生下国東海是西隣九譯蕃君使千年聖主臣野情偏得礼本姓不含仁

帆来風轉金蕉怒地新孤域開唐闕 暁日上車輪早識水朝歳塗山玉帛均

李太白集巻二十五哭晁卿衡詩云日本晁卿辭帝都征帆一片繞蓬壺明月不歸沈碧海白雲秋色滿蒼梧

元和郡縣圖志巻二十六五明州開元二十六年採訪使齊澣奏分越州之鄞縣置明州以境内四明山為名

古今序云久々のありよーてハ古とてるひめのよむ〜まりなりけるものなりけるとの〜ちよーたハ古とこの〜ちとこそかるなりけるそおろりなるちいのるる外代よハ男のかりもさごまらをするをすーてとこのムるさごろつとさ〜人の世とかりてきとのとろ乃ととめのぞとろかーあまるひとかーハとるとるること」

もそこなるべしといへす　船いも極をこそひあ鈴の旅乃くるーさにるさもゆゑれハとるびーとも　山のそもなくてこそ海となれハ山の端もなくて海の中ゆ月のいるゆうよ西とも　くるけーきをえて和仲麿の明しもろ〜ゆくゆをとゆ久ゆ　安倍仲麿の明しは傳ハ標注よひるるゆごとー標注よ知るるおもゆ　ゆゆもくれどうゆきれハあげも　あまのつゆきあるてゆこハ冬集の左注よめいーとハ海をそとあれハ明州なるべー明州のよ標注よひるるゆごとー　かーこのうゆゆこつりゆこハもろこー人も送別の詩などつくれるをいゆなるべーもろこー人の仲麿よおろれるー　持も標注よゆゆ世りその月ハ海ゆゆゆいでるゆくゆの時詩もゆひのごとく海とゆりゆで見ゆも　秋代ゆ和もまゆびゆこゆ國よハ弥代ゆ和も詩をあゆこゆまゆとゆ和漢のすハ標注よあゆへゆれど古ゆ注をの命乃やゆもたり孔

万葉七
久かたの天の山ゆ二月船出遊士之歌
酒杯乃陰乃所見皆
同十
春日在三笠乃山乃月母出奴可母佐紀山乃開有櫻之花乃可見
同十八
都奇見礼婆於奈自久乃奈里夜麻許曽波伎美我安多里乎敵太豆多里家礼
文選謝希逸月賦云美人遺兮音闊隔千里兮共明月

清水のすゆ古とてるひめのあもなるやの玉ゆすなどハ皆人もをくるるゆ知れハそ
ゆゆをるさハ　あをうゆゆ〜ゆ真鍋ゆ左冬集ハあまのそゆとしゆのせ〜れうゆ
天の不言為不言ゆうよいひてさへなるべー海上なるべ今ハ海水のうゆこを
ちゆれしとおゆゆゆあるきけのあゆハ詩さけハゆさけ歌さけなどよ同じくゆる
うよゆるるゆゆゆく行この巻ゆすゆ古今餘材抄續萬葉論などふもハしゆ
れどゆすながゆれハゆてゆのせハ本書ゆつきて見るべーさてこの巻をゆるの
ゆるゆ古ゆなれハ文中ゆかゆつゆくべき例ゆを法ゆれ和ゆ巻のなゆるゆうゆ
又巻後の書ゆりも文中ゆ巻をゆき入ゆる体なゆ孫ハりとのまゆ巻をゆきつ下文
二月九日の条ゆ業平朝臣の巻をゆき入ゆる和ゆハもゆ文中ゆゆきゆ法ゆけ
ゆゆを巻後の文も古ゆを文中ゆゆきゆゆ体なゆ巻ハ

こゝゆ國の人をゆ和るまゆ（生）くゆ（も生）ゆゆ（け為）ゆゆ（も生）ゆゆとのゆ我

李吟云とゝもゝどうなををんかうとうよ
野てまれを男文字とうも
真淵云男文字女文字とて是別なるべしいろ〳〵のなべてこゝろ〳〵なるなのありしと女しゝ
ゝ俗ふりとゝ俗さて仲麿ゝこの言を漢文
まぎ〳〵るをゝ〳〵おしすく通しさうとゝのゝ通字
のゝ〳〵いま〳〵作
漢書十九百官公卿表云武家奉官掌諸
歸義蠻夷有丞景帝中六年更名大行令
武帝太初元年更名大鴻臚應劭註云郊廟
行礼九賓鴻臚掌賓客之也
大唐六典卷十八云鴻臚卿之職掌賓客及
凶儀之事領典客司儀二署以率其官屬而
供其職務少卿為之貳九四方夷狄君長朝見
者辨其等位以賓待之云云
後撰羇旅云土佐のくにまりのぶりとゝみの
うちまて之行りけるに月のそらなりけれ
なくるのつゝ中ゝにえゝられぬべうー安
紀のなりまゝかりとゝーをゝありければ
とゝゝとゝてゝし　つゝゆき
後拾遺羇旅宇佐の使をてつしまわたる
をゝ月をまりをゝとゝ行
摘為義朝臣
ゝやゝゝ山のえにえーー月ゝゝを
ゝゝひゝ波のゝゝまらをまそ
源氏さゝゝゝ
なゝゝもゝゝゝ

夫木卅三　民部卿為家

ちりぬるをあだ一ぞのうらはけふもちりぬるかぜのなかれとをみる

同　権律師敬香

ふるもせよ　ちのうらなみなびけく

拾玉集原引世本云古者觀落葉因以為舟

李商隱詩集云萬里風波一葉舟

万葉十九長歌

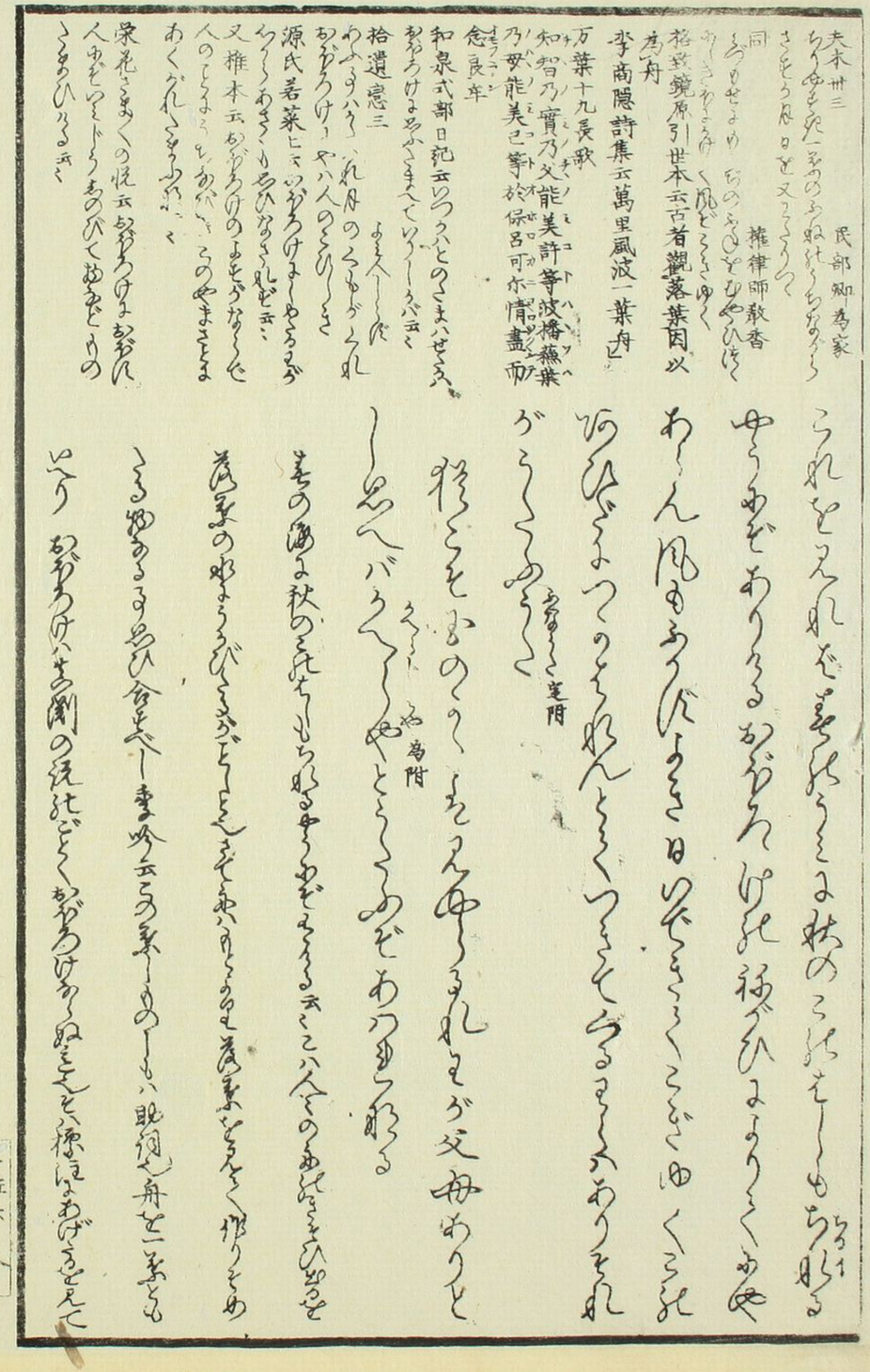
知智乃實乃父能美許等波播蘇葉乃母能美己等於保呂可尓情盡而念良牟

和泉式部日記云ひろうとのこまはせえ

拾遺愚三　よみ人しらず

源氏若菜上云

又椎本云



真淵云ものはかけはたらくことなり　ものはかけはたらくこの後ひあそやかあるべし李玲の説に拾遺愚抄云ものはかけはたらくこの後ひあそやかあるべし

なれこそ國のうちはこの事

とうこうあそあれなる

和名抄羽族部云鵜

十六夜日記云

李玲云

真淵云

古事記云天照大御神者登賀米受而吉

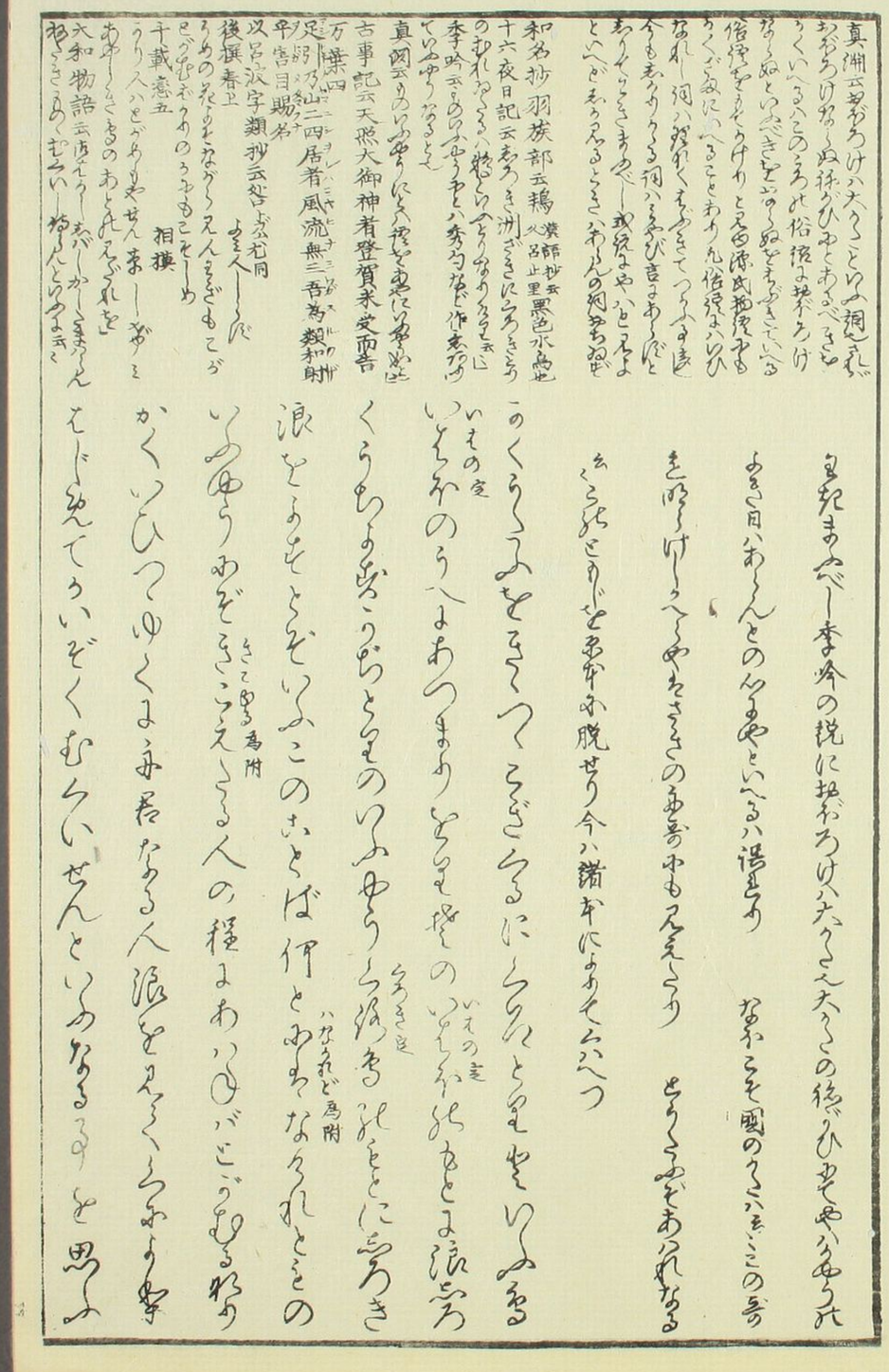
万葉四

居者風流無三吾為類和射

以呂汝字類抄云

後撰春上

千載恋五　相模

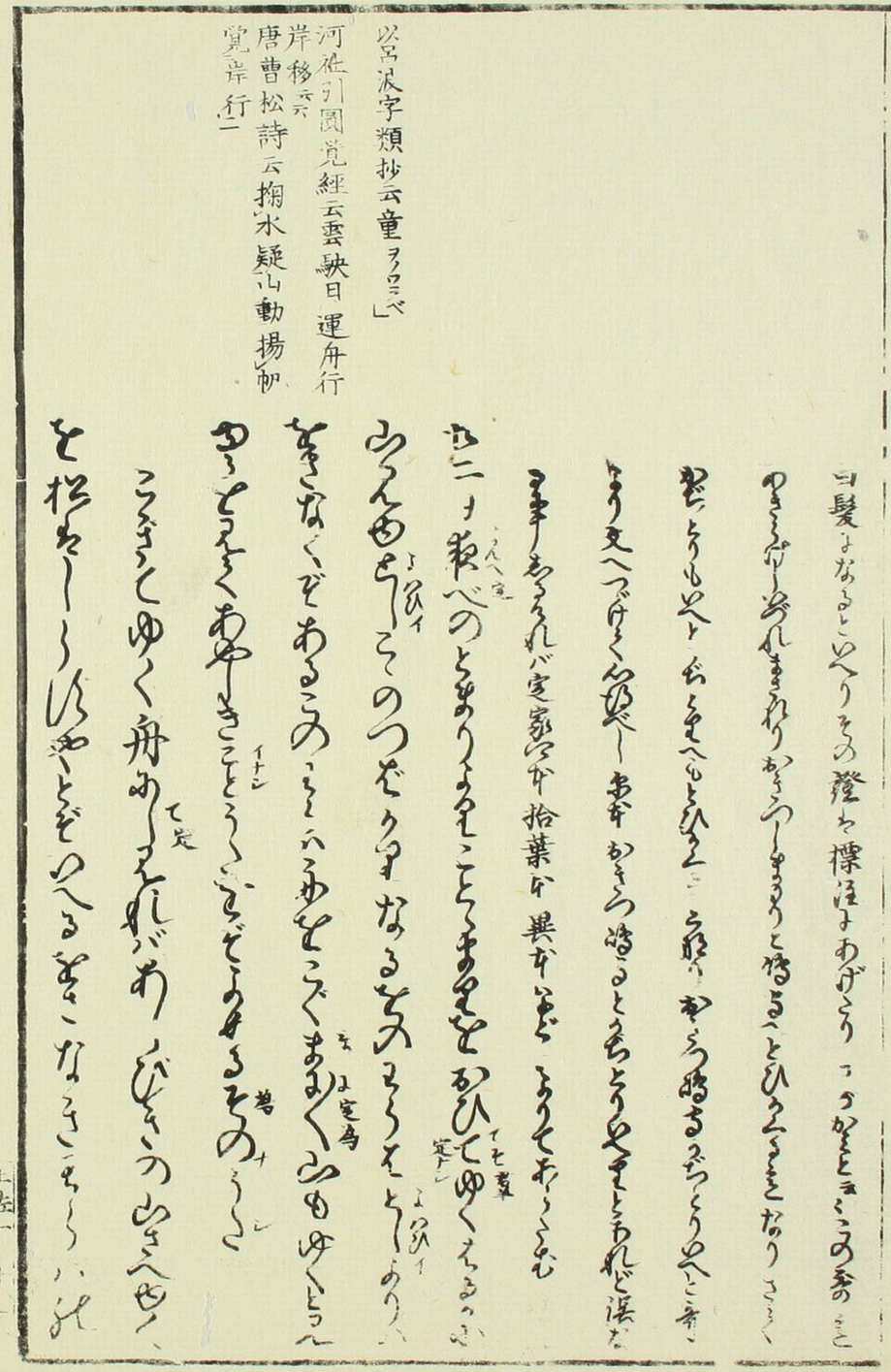


宇津保俊蔭云ふ國のありさまこれに記かるる人むくいせんと思ひて四百人の妻まで源氏賢木云后のれいいちやくてくるぐ
ゆかりつかうまつることでものむくいせんと思ふ
をべうのかみ
下訓抄下云彤史抄云大臣八小一条院の女御あるをひまうとうの御堂関白を恨まりて
怨霊とおもく一夜の間にこくく白髪に
なりさまひ名をいのこ抄をろしなれこそ
漢書第五十四蘇武傳云武留匈奴九十九年
始以驅出及還須髮盡白云云
南齊書第三十六謝超宗傳云武帝收
謝超宗付廷尉獄一宿髮白云云
世説巧藝篇云華仲將能書魏明帝
起殿欲安榻使仲將登拂題之既下頭
髮皆然因敕兒孫勿復学書
埋雅巻一引養生經云魚勞則尾赤人勞
則髮白
李吟云いづもまきかりくいづれうまきかり
久と食ることてはもるそ
春きも思ひこつくるのを人はまこ
ま間なかりなどあるこひ抄やく
給り春はりへでなるをもる後きるあ
なりなもりへいはいの白髮とし〜
との物者を略ぎる宣ひかりて又抱久も
この世ありまきりをへとひづけ事
真岡云万葉四ノ八百日ぜく浦のまきでも
そが恋よまあまきくめやはきろしま

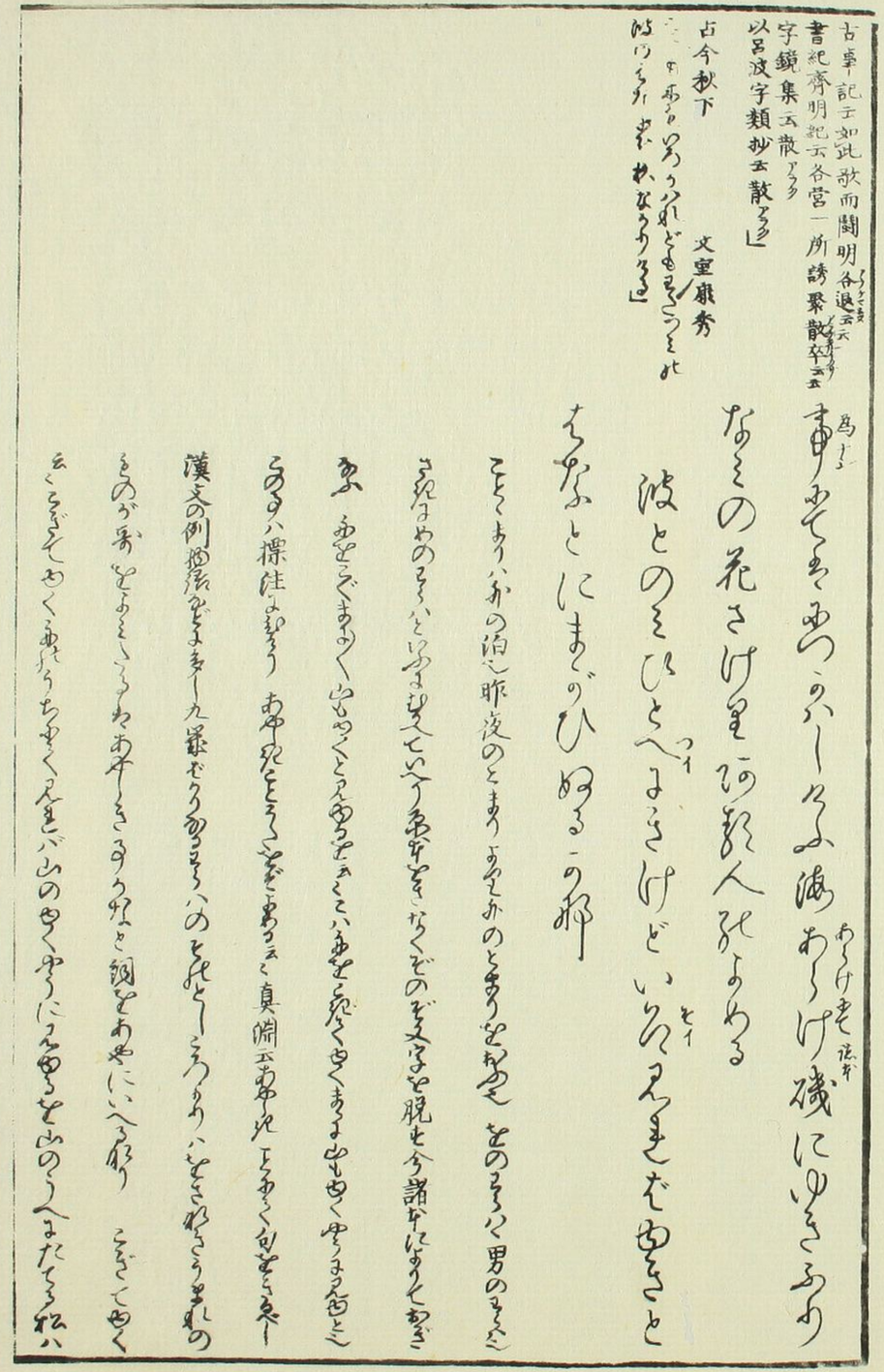
うへよ海士まこと抱をろし〜くもしばのしらもみれ〜らけぬ
なくそぢやそぢろを海はあるうち抱なる業々ろ
まこと抱ゆきとゝをべの忘〜かをいづ見まさ
とぎとろへを原本妙詳
まつの抱きつ〜まもるをかがりとろいへ
ろをある標注よひけるがごとし　まろを派をまもらぞいふこの文
原本よるとぞいふとまれどるの字衍ある〜〜〜〜〜れば今ハ拾葉本類從本
などよりてもがきつ　抱いあるめをきこえくるこいりのくんあるく
興あることをいあるうなりとやるなり物語標注よあづるがおとし
人のあるまあいびどがむるをくるる海きがらるる抱どの見ずていへるを云
まろハ〜〜ねばかくをぶむとをどがむハ尤抱の字なをを別ぜりろハ抱をあや
しあるるろをまるの鏡ハ標注よあげ〜り　無なる人をこ紀氏をろ〜をいふ

かりころ多を思ひてよこるあや
なるべ〜　をとろんてをく身別云波をろてハドー海のまこあそろし
をれバといふへうけてをんべ〜云ことをまこるこ　事玲の多あり　ちがめてとハ
主佐ろ永出ろ波をろ〜　死氣のあり〜ろの色といをれしハ
まくへて　ろをくむこいはをんとをくろいをハ海賊ありしをハ紀氏任國にあるを海賊をどの
をろをを標注よひけるを注をろてハ紀氏任國にあるを海賊をどの
りことをあわ〜しかをこと海賊をくあり紀氏をれをてをいをきろ〜をきを
まをあをるをあるをけるハをの色をるあるくろをを　ろを一章事玲の続い
くをろへりを物をひをこをるを〜　かをもをな　けをなるをどやをを
海よををるをのあり色を海賊を海士をあをろ〜をををろ〜辛勞〜をれバ〜ら
ら白髮よなありとを　をを七八十年のおを七一時ををを多　きをり〜中〜を多
ををされバを　ををやをで八海よあをるめををりとハをへり老を人をを労をれバ

以呂波字類抄云童ワラハベ」
河花引圓覚經云雲駃日運舟行
岸移云云
唐曹松詩云掬水疑山動揚帆
覚鼎行一



古事記云如此歌而闘明各退云云
書紀齊明紀云各営一所誘聚散卒云云
字鏡集云散アラク
以呂波字類抄云散アラク」
古今抄下　文室康秀
[illegible]



心のやくをばあらざるやうなり　海あらけへ後年に海あらげまとゝ
けとのゝあるあるこの事とある事なりと説後年とのゝなれどこのあれどくあけ
とのゝあるをうとゝ説きてあらけへ海のあることにあらず古事記は各退とゝ
あらけまぬと列ド書紀は散卒とあるをあらけるゝくさと訓ド字鏡集は
波字類抄などに散の字をあらくと訓ずるなどゝそもそもバ波などの散るをあら
けとハそもしなん波の散る所に磯にあるこの花さけるをうにゝ西こそ海
あらけのけはしおそるべくゝ説海あらけ磯はやきゆ波の花さかりと翻ゝうさ
ねくうきこるも一つの文勢なり諸説ゝ海のあることもれど実は海のあ
ることハいとでかく歌をもあらく波を重ねまえなくたゝれるけるすれあらん
ゝをえても實は海のあるあわあらるるを考べし　彼とのゝこゝハ
彼とのゝこゝで一枝なるつまどゝをえれバ事やどよまがふとそ夫か後に色を

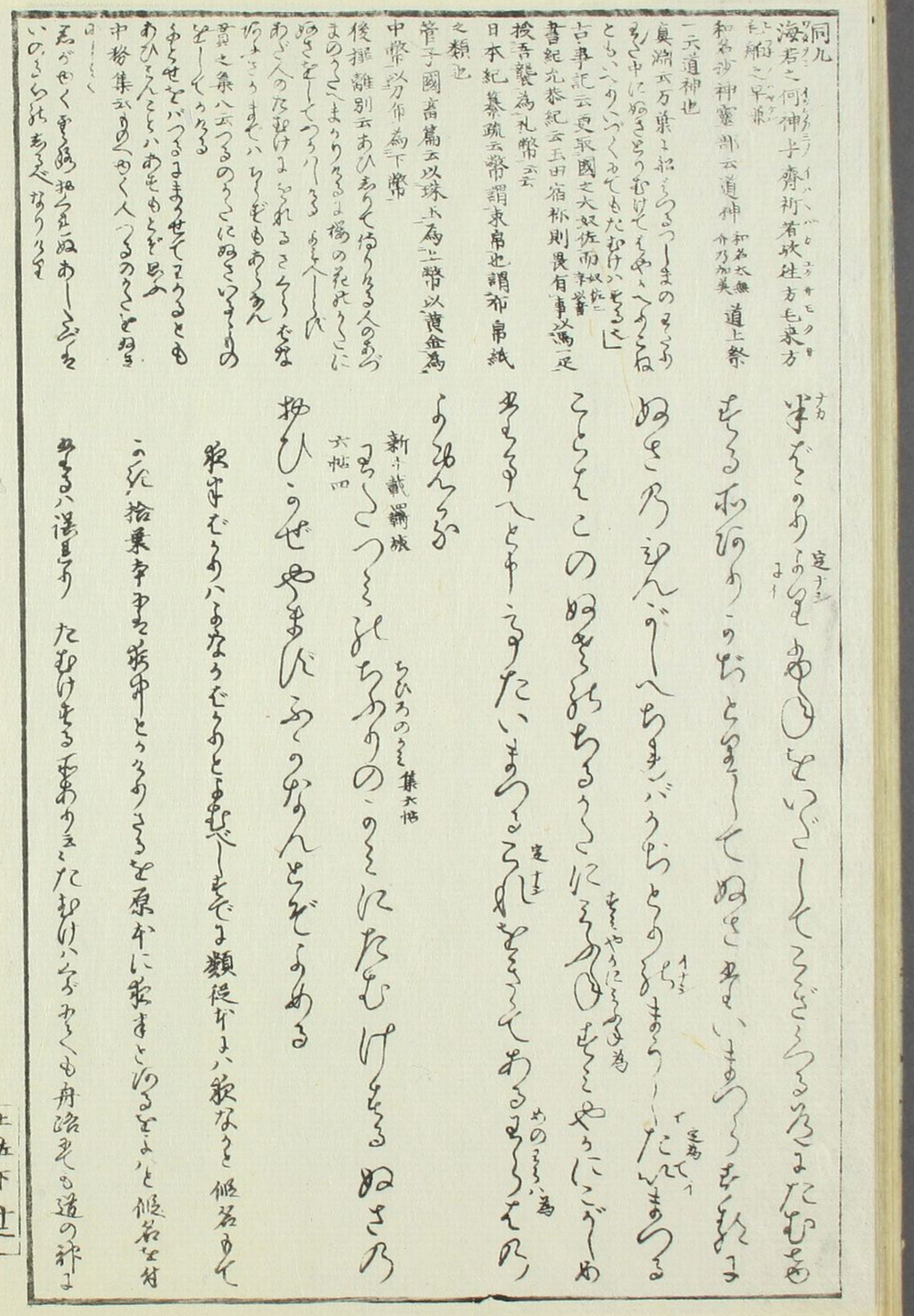
古今序云枝のよれなるきをうとてれば
ゝうハ人のゝに枝をゝうハ事のゝなる
ゝら枝へど云く
後拾遺神祇
さゝうきにさゝるゝさうげの花ゝ枝ば
ちりの枝をうハあらじとぞ思ふ

和名抄機殿類云機師文選吳都賦云
擅工機師知之州

万葉三
佐保過而寧樂乃手祭尓置幣者妹
乎目不離相見涙嬬哉

ゝり波の花さかりとあるもこの歌にうくひゝゝん料なり
廿三日日ちりくゝるゝ事ハこのゝくゝり海賊の枝そゝり
あるゝといへどこのゝ　ほとゝ事をこのゝ
朝のうちゝゝしはちゝくまこゝ分れるなり　枝を見ハ思ひてゝとれを
ゝよハせゝるのゝゝ花ゝゝ枝をゝとのゝいへり
廿四日はゝこのゝ枝しとゝゝゝゝ
昨日のとまりと乾じ海なるべしゝこの花ゝ枝ゝ
廿五日こゝぢとゝゝゝ機師ゝゝゝゝ

同九
海若之何神乎齋祈者坎往方毛奉方
毛解之早兼
和名抄神靈部云道神 和名太無介乃加美 道上祭
二云道神也
真淵云万葉ニ和ラヒつるつしまのさらふ
ねさ中にぬきとり取けてそやへうちね
ともいりいつくゑてもたむけハせるを」
古事記云更取國之大奴佐而奴佐
書紀允恭紀云玉田宿祢則畏有事為二定
授語襲為礼幣云
日本紀纂疏云幣謂束帛也謂布帛紙
之類也
管子國蓄篇云以珠玉為二幣以黃金為
中幣一以刀布為下幣
後撰離別云あひ思ひそ侍りける人のあり
まのうさまかりけるは場の花れうこに
ぬさをしてつかはしける
あぐ人のたむけまつられるさくらゑな
ぬさとうまれハちるもあるかん
貫之集八云つるのうさにぬさにするもの
をしてそかるる
あふせをハつるまろせてこるとも
あひうんとハあをもとをぬ思ふ
中務集云ものくやく人つるのうさとぬさ
ロ
君がゆく雲路はるけぬあしぶを
いのるこころはあるべなりける



宜長云ぬさハ祓まとに南るものをもいひ
又枝まつぐをもものを名義ハ禱布
佐ハて事をひねぐとをいくこもうこ
ねぐこをでむまハかとなるあり 枝乃
ぬさもをの恵樽をのぐき清めこ事を
ねぐこをもをぬ なりハ祓ハまりく
祈ぐこをハ一つなりこて布佐ハ麻なり
古語拾遺ニ好麻所生故謂之總國
古語麻謂之總也今為上總下總二國
とあり」
神中抄第十九云
やくこ者ハこんとこもたまぐとの
ちぐりのこをいのれとこ思ハ
題記云ちぐりの祓とハ今ちぐりの祓と
いつあや偽論中もあり
ちくつくこの云
この二首ハともに貫之歌之
隱岐國ハこと知夫利島といふ所ハ
のこやとの祓ハ此ハ知れ知ぐもこそハ
その祓に幣帛してこうをいのるこそ
ヤもをもをむ幣帛ハ海をも二分をを
たこうれる祓をハちぐりの祓となづけ
こるあ又その祓をハひてうの祓やも
つけこるあ これハあまりのことなり
真淵云道々の神道守の祓などあり
こをハ道觸の祓といふこてハ海路ま
ろうていへるなり

てがなくこんやうやといのるをいへり万葉ニ祈の字手祭などの字をたむけと
あるごとしまこと真淵の説ハからあけこり ぬさたいまつるハ注ぬさハ
幣をもあり云こ真淵云ぬさハ麻ハその名ハ 猶弟七尺なごつ祭る事に
万葉なのどあり常やも猶ぬさとあり後ハ旅ハらまろにはるを

拾遺愚草中

ゆまびめのぬさとも扱ひ給ふ事ときこえたり

新撰六帖四　　光俊朝臣

なにしつるぬさの扱ひ給ふ事もやうれぐ

まうらしぬぬさとしぬぬ

本歌云ぬさとりあつめてはらへ給ふ事敷など

うつしとりて祓の帆をかうつはまをへく

うわり

真淵云帆のまこもは縄を扱くつけて

太へ丈へ引くうんとまる縄をなでといふを

ぬをとりろぶはいとつくなどうつを

祓の帆はを陸ろしもるにをへく

あるなり

谷川士清云ほで扱よりハ扱はなり

荷鋪　もいと

女　おきな問

いつしくのこし思へどあはんいとくあらじ

淡路

らしの浦にあはぢのこうめをいふ人乃このめるこ

妙

おしのぐちふきぬるぬをゆくかぬのおぐろ

古定

とそのことをうたいへる為

てしいけのこうつけていのる

てしいけのこうつけていのる

その扱をこそ帆をあぐるまへこにこの扱をこそとあるを扱の

言ぬをでうらてといへりけて思べしらさまとはあり

まうらてこそとハいを

まこも女もとある女ハもと扱んなかをあり　もとんぬく女と文字を重して

うぐるかふんこ　ハ　なるなを知へている扱しハ扱んをそ姫とあり姫ハ老女の

名なりさてこの扱ハ淡路のこうめとあるを同人か也　わがたのこうめを

たうあのるハ上文に月の日の筆ハいへる下文淡路の巨るとあるを同人なるべし

扱ぬをのこうめ　ぬをこうけ　をでハ諸説なる歌の具ハ帆をいふ

真淵云天氣のことにつけていへることの

あるり　四表コ　くあるあんさなく

てハこの詞ぬ仕　　

管書長安明帝紀云明帝數歳元帝抱置膝

前爲長安使來因問汝謂日与長安孰

遠對曰長安近不聞以從日遣來居然

可知也元帝異之明日宴群僚又問

之對曰日近元帝失色曰何乃異問者

之言對曰舉目則見日不見長安由是

益奇　　

世にはあれど実にさる具今もありや扱ぬをとることなしされバ扱ぬをこハ

扱をとるぬぶとぬ扱をどうちそとるふををでうつといひしたんさてされば

帆の帆をかけていへるまでもく扱帆と帆の字一字のこうめてをまでへを

うらぐる詞なるべし枕詞なるこたゞ一字にのこうめてをいひつけこる

例をもしるべし　ていけのことをつけていのるをこていけハ天気を

上をてけとあるを同下言の扱どうむをつけくも天氣のこうれうこハのこ

とのをこされどを当関をいへることあるをにあこがれぬ

世なるこうぜふきなこあるこうくまバあいぐさはこれのこ

うこくなばくく男たちの「定十シ」ふなあぐさあるこうこふ

日をのぞめバ都とかりなどいふあるる扱をこを

きくてある女のよるるこ　秋十シ

宇津保藤原君云いかうちうちひてつまもたゝきをしてそこと申さ
蜻蛉日記云いとうしこしそつまもてきこうちしてそもめいとぞこと
源氏空蟬ふるの人はものをつまもてきをこつこうこうこうこうこと
東鏡巻四云弾指
梁書巻四十一褚翔列傳云翔少有孝性
烏台中時母疾篤請沙門刹福中夜
忽見戸外有異光又聞空中弾指及鏡
疾遂愈或以翔精誠所致焉
維摩經云度百千劫猶如弾指
太平記音義巻十二云爪弾ハツマビ

はをぐもあまぶもちつくるものを都へも
ゆのふをたるけさ又ある人のうめ
あくこのぜのくこゑぬうぐすしたちられだ波路ハ
いとでそるけさの梨ろりは百ねやまびつまハ
さをしてねぬ

かこくなびくかこくハ古事記ニ恐をかこ書紀万葉などニ可畏懼なせい
ふこそとハ恐をこなしどこおいくなどいふ事ニもちひり　日本のだ
めぞ都をしこの詩の句ハ舟中の人れ作ありべしされバ男たちのんなくさ系
六帖　日をぐもまこうのをを詩ふ〜晋の明帝の故事に似りそハ
摽注ニ見るを見てあるべし　ふくぜれこふくぜのくこゑぞやくぐりを
波もこちやまぬ都へとも波路ハをいつとれくちるけさもやうにおろこと

万葉十九
宇良宇良ト照流春日ニ比婆理安我
里情悲モ比登里志於母倍婆
春日遅々鶯鳴正啼悽惆之意非歌
難撥耳乃作此歌弐展締緒
江談抄巻四云東行西行雲耶々二月三月
日遅々天神令教曰トサマニモキカウサマニ
ユキクモハ〜キサラキヤヨヒウフ〜ト可
詠云〜
毛詩國風云春日遅々采蘩祁祁
芝薫中抄云つめきる日午の爪丑寅巳の
爪寅午
日本紀纂流ニ云凡陰陽家丑日除午甲
寅日除巳甲云吉又云寅日三戸次両手指
甲午日三戸次両足指甲云〜
趙生八箴守庚申法云甲寅日可割指甲
甲午日可割脚甲
菅家文草巻六云予亦嘗聞干越老白陽
子日野遊厥老其事如何其義如何倚

つまもたゝきハのをうるまくるをよほのをぞ彩漢ニ弾指ハ云もつまもたゝきを

世八日のもをぞうあやもしぐけさも

弾指あるをてけさもやまざるなりうるもをぞうハ廿七日のををいひ

けさもハ世八日のあさなり

世ハなるのいとぐしてをくうるうくとてうるをぞゆく
つあいとなるぐくなりあくるをんくなをうぐあれかるあ
ふのはなりうれバうるをむつきなるバ系れるのは
とをもひイ
のことひいぐく小指もゐなをといへど海なうれだ
カるうしある女のうきていぐをるうる
六帖一
ぬぐつこのなるのるうあまなるぐうるまの
しをひくぐうるる六帖
をぐよものをとぐいへる海あそるのるれ

松樹以摩腰習風霜之難能也和菜美而略期氣味之克調也云々

拾芥抄引十節記云正月子日登岳何耶傳云正月子日登岳遠望四方得陰陽靜氣除煩惱之術也云々

真淵云今日まそ日ごとよりもり風ふきて
[illegible]

[illegible]

[illegible]

李吟云土佐泊ハ阿波國ノ鳴門ヨリ一
又云ヲサヽと云ヒヽ和にをとこ有る女こゝろ紀氏土佐の任國のゆゑとあらハよいそで
発端中もある人おぐるの臣とをもをもとせと
書て土佐といそぐりしかバくまゝうく
むりしなゞく楫めゝしてゝけるこ
真淵云土佐の泊とゝハ阿波国まあるこ
ある人ゝへりさをむゝ一土佐といひる和に
侍る女とゝゆを土佐國土佐郡土佐郷ま
任し女のゝ紀ゝあにちそゝあるなるべし
男をのこゝ紀國のまるなるをゆあくもうに
ホとゝハうなゝ

万葉七
住吉の奥津白波風吹者来依留濱乎
見者淨曽

押もしるゝ所よ舟をゝ出せてゝゝやいづこゝとゝ
ゝまこバ土佐ゝゝとゝぞこゝるもゝしゝさゝ
いひる和にをこゝる女の為のゝよあゞ定まるゝゝ
ゝひけゝくもゝしゝ出ぞしゝゝりゝ和名たゞゝ
めぞあるあゝまこといひてゝあるこゝ
いしゞゝをゝをゝみゝ和名ゝ地へバこゝる
波をもあゝまことぞゝゝる為ゝゝ妙為群
ゝゝれどゝゝくゝゝ為ゝちゝけゝゝけバ書日壁に浦のあゝ為ゝてゝこゝ和どゝに
あゞ綱をゝゝあゝてゝいゝまゞのゝをゝゝる濁ゝ為ゝ地のなゝれバ今日ゝ見ゝ和ども
ゝゝなもゝゝゝ

万葉十五
平可之欲里伊比祁流許等乃可良
久示能可良久毛已許ゝ和可礼須留
可聞
古今雑上　　もと人しだ
坪てるやなにはのさとのあしのはのいつれかあしかるらむ
見聞抄云阿波のさとハ阿波の鳴門
なり田無川とハ和泉なり
拾遺抄云沼島淡路の海中にあり太平記
ハ武島とあり土佐泊より五里云ゝ北の川
和泉の田川なり
真淵云万葉に淡路の野島のさきとあり
万葉三　　人麿
三津崎浪矢恐隠江乃舟公宣奴島ゝ
宇鏡集云恤

をとこ女このくく神佛をいのりてこうしみとを門
ちうのぬいてうの間ごとのまに奴島といふ所をもて
田井川といふ所をもてるこのくくいをさて和泉の
瀬といふ所よりうぬふ海よりはかりなく弥陀の
恤ハ仏ちうふあるのもしはようこのぞふまもて三十ぬ
あまのあるかるよりにたをいつまをいづこのくあく
ちうぬまもしだ海賊ものかくしび
海賊ハ海あるさハせぬのぞとまて野井にあるてもくと　阿波のさとハ
阿波の水門ぞとなといつまれて是阿波の鳴門をいへるなんをたの次ま
いて　くくく半仏をいのりそこく雲砂の法ま幸ものとをとれハたゞりこハ
万葉古今なとの例あるをハ標注ま知るべきくくく祈れうけをいのりく

このことをとうぬとあるをそ是ハ阿波のさとハ阿波のなるとをいへるあるのつぎに
奴島とあるをもそよ淡路の国ぬしまが浦ハ阿波のさとハ阿波のなるとあく
ちうのをとをたりあるそ是　田井川ハ李時珍云和泉の田川なり　和泉ハなゝ
和泉国和泉郡和泉ありをこの瀬ハ　久万海ハ時珍云ゝ海なり云ゝ
こハのとうなるをつくいそのうきざあを　恤ハあはれをとうをべ一説
にうまつるとハ仏名をつけくるハ誤なり　三十日あまりの九日になりにけりと
上文十六日の条ハ日の条ハどまを日下文二月廿日の条ハ日をうをくるを示ありかく
たゞくをとうぞあるをまことに海路の日をへくるにうをつれくるをあるをこ
うり　かゞぞくあのなゝ法こハ和泉の国ハ織内をあるも都もちかくれバ今ハ
海賊あくをあもあをあ法をあ法をこハ今までハ海賊をいくを拾をれつをど今ハ
をもちうれをんづうくなりくるをまことに女のんをもあるべ一

二月朔日朝のまあめふる（釋）はれぐこのゆふ
やまぬまで和歌の浦（たゝえ為）といふ所を出て
ゆく潟のうへさのふねごとくは（為ナシ）風波見えず墨
濱に松原を過てゆくところの名をくろく松の
いろをあをくいをり波はこまかごとくうり（諸本ナシ）白く
貝の色をなす（蘇枋）うまれて色よいまひとつのぞうぬ
らにあひざよりふるまをこの潟といふところ（扶ナシ）紫
つなぐ（牽紋）ゆくこのくゆくあひざ示ひる人の
ふをるうこと（イナシ）
むらげたこの潟なる人ぬ日をうゝ家
このぐこと（ゆ為）うゝ見ざ〳〵ん

泉州志云日根郡黒崎在淡輪村」

和名抄　染色具云蘇枋（俗音須方）入用染色也
山家集
あれをむるまもうのこゝひ見ふとそ
いろのちまとハふまやあるゝん」
尚書益稷云以五采彰施于五色纂沈謹
五色青黄赤白黒也」
重之集
ちこのうゝたわけ乳あをぶあゝ〳〵づの
ちとせのりけをこもとゝあゝん」
和名抄　舟具云牽紋（音支割日奈天）挽船縄也」
人麿集
あゝ〳〵のさゝゝゝあゝん乳ま千〳〵げ
まゝてゆ示ふのあゝんけゝ〳〵」

黒崎ハ和泉國日根郡なり　所の名をくろくとハ黒色をいへんそ黒濱
といへバ黒きにてなるべ〳〵いれなり　色のごとくよ白くこゝく色のごとくな
日とあゝど日の字ハ白を曰〳〵語ものゝ所なれバ拾葉集にもの異本と
又別の異本とよ色のごとくに白くとあるにはあらずあゝ〳〵む　蘇枋ハ黄
赤白色なりとあるさハ別の名称異稿といふよしもなきさハ松のきもて
ゆゝ色白きハ派もてあきハ異のきの蘇枋なるもてゆゝ色ゝれど色
に美が〳〵ゆゝ色とえ　ちこの潟ハ和泉日根郡箱作村なゝそハ泉州
志箱作村の事よりの文を引きてゝるあてもあゝ〳〵　つなぐハ標注ハ引ける
和名抄まんゆるがごとし〳〵　むらげたこのうゝ潟云むらげたをつゝる
るハ万葉中もるゝ〳〵標注ハ引るがごと人麿集の歌ゝ名をかゝ〳〵題に
ある中にてゝるゝるのゝゝそこの人麿集といりのゝけひゝゝ死

万葉一長歌云真永乃都麻手平百年
五十日太不作云云
紫式部日記云はいろハ百年の間の日
もいりあくるまでのぶりつゝひくゝ云云
栄花物語花山云はいろやもうなどもさ
さぬ云云

[illegible]
[illegible]
[illegible]

又五月生れて母をいかりうなどいへるも五十日百日なりうれでいふハ五十日
なくさの論なしさてうちはこハ日ぞをうぞへて四十日もあるべく
五十日ものよりんとうるをいへをこハ今の世よりハ五十日をどいうんごとし
實八十二月廿一日より二月朔日まで四十一日なれど扨わうをハ四十日とそ
いへるなりさるを李冷の抑あてよ四十五日といとれつるハ実のはうずも
たびび諸例もうぞとう　などごとなる云こそこハとをも
ぞこれありのまにいへるをいへこのうををさく人のなどうこのやうだ
ありのまうれさこもいんとへ古今の序よりなどこそ云ことあるも同ト
ひとうにいへべしとあるを原本にをうよひとあれどてるををもと
つ、沈語ニ　この沈ハ清かにありてあるこむ　初ありいて
しとハ上文よりあなひごとなどいへるごとくやうくとてうごせ〜

こハ詩ゑ拈出などつるがごと〜誣へそハ考へそとるひべ〜もひいへと
ひとをもぎさるを弦言ゑ遣入をもひとをひがごと〜　真閑の疑標注のあげ
れどすともをられば　さるをそやこねこハ知をうたさやくとをより万葉
に咽言をあるがごとこの文緒ずつやきそやこねとありてさやきそとあり
ハこの本なと聞書本見聞抄異本とのこなれどさをきてとあるこをまるうこん
二日　ひとをまび　日ひとる　ひとをうる為　歌ゑをけをいのる
彩もをう祈をいのてあるせ〜ようこ

三日　海ゑうへをのかう　やうなるまバ　ひごさんうぜの　有三
やくことをまぬをこの　海ゑうへるこれなつけ　注
ゑをうこ

伊勢物語云伊勢をうのあこひの海
つをもくゑ浪のいとまろくこのをえて
いとぐしくもぎあくくをとひきよ
うくやましくもくる浪うの花
拾遺雜秋　よこ人しら
よどうをそうかこひとうをなくれ
後のむろをとやなくうこん

霊異記云々句 カキ并又存 耳比止

伊勢物語云々とよめるうたぬせ[illegible]

大和物語云々[illegible]

和名抄微賤類云々見揚氏漢語抄云々

索見保賀比々止今按云々索見郎乙兒也

和名抄多井

真淵云々ハ伊勢物語[illegible]

[illegible]

土佐下 廿一

万葉十五

和我袖波多毛登等保里豆奴礼奴等母

故非和須礼我比等良受波由可自

六帖三

[illegible]

万葉五憶男子古日歌 山上臣憶良

世人之貴慕七種之寶毛我波何為我

中能産礼出有白玉之吾子古日者

六帖三

[illegible]

真淵云こハ女児のうせたる歳をしむあまりにいをこゝろ[illegible]

[illegible]

[illegible]

書紀皇極紀云有謠歌三首其一曰
波鼻波鼻が葉騰曽枳舉 猶鳳凰
萬葉五
波濃波濃が於意方由流可母 意民久毛
能智弊仁遊多天留都久祭能君仁波
古今 羇旅 在原業平朝臣
うらみてなくなれやつままちがほにいなびかまほしきをいなびかねつる
萬葉六長歌
續麻成長柄之宮が真木柱太高敷
而云云
同十三長歌
夏女等之麻笥有續麻成長門之浦
丹云云
萬葉十一
朝東風が井提越浪之世蝶似裳不相

鬼故滝毛響動二
萬葉四
神樹が毛手者觸云乎打細丹人妻跡
云者不觸物可聞
志見集
[illegible]
濱松中納言物語云[illegible]
季吟云[illegible]
[illegible]
[illegible]

万葉よりこゝをなを毛門の海又こゝをなを[illegible]の文[illegible]よりの[illegible]のこゝ[illegible]
さて一首のこゝハさゝきもゝもちゝくなりといひて[illegible]ばゝのそゝろ[illegible]俗
くるゝ麻を紡をいひうけうゑ[illegible]ゆきゆれねばとあれどねとぬとを得る
多[illegible]ゝ[illegible]ば諸かになりてゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

おもうきこゆ
あるとうるはよは風のうさ紀はあべしく
りつの沼とうるえ安まーつ」
古今雜上　　みなのごゝも
せゝらぬとあまハつゝくもあゞねもな
へるもまこ未ぬとりのなり
同
乃ゑ〳〵ハつゝもゆんもゝれにろ
ゝーよまゆてゆゝこゝもゝるゝ
和名抄草類云萱草兼名苑云萱草
一名忘憂（蓮華抄云和須礼久　佐伽云知球草音）
毛詩云焉得諼草言樹之背傳云萱草令
人忘憂云〻
文選琴賦夜養生論云合歡蠲忿萱草忘
憂愚智所共知也云〻

さゝにるるとあ屋よろ栗ろよ むゝつ人ゝ（為士）
ひとるゝこゝゆゝもるもゝ ねゝゝうゆゝ
紀の沼よゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ（よ為）
あ栗やとつゝて（ゆゝゝ為）ゆくべゝとなんうつゝへよるゝ
なんとゆてあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

真淵云ながゐハ長目と云て物ゐひのてうちすゑりぬるほのゑれるゆゑ
ものゐひゐるほなくゑハいとぬ風くゝ
えるゆゑとのゝゐゐべゝゝ」
源氏夕顔云さの方ゐてなく
あくがれんことやゐハゐひゐをゝひき
以呂波字類抄云卒尔ヌリナシ」

万葉七
大舟乎荒海尓漕出八船多氣吾見之
兒等之目見者知之母
宣長云ゆねさけハあゆさゆゆくゐろ
くとゐくゝきてゐどこくをいひて
ゐゝとゐをつくゝてゐよゐひくるを
たとへくるなり

さゝようせくるよの毋之紀氏うゝをいふなるべゝひとるくゝ毋ゐうせゆゝゐの
ゐゆをゐゐゆゆなゝとゝむゝつとゐるつゞハ助辞あれゐ　をゝゐにはきゐゐ
ゐゐゆゆ行の行よゆゆくゐゆりさんゞ行の行よゆゐとゆせくゐをゐれ系のゐゐゝ
ゐりてゐひをゐをゐゐゐうとつゝてゆゐんとゝゐれ系ゐゐ標注よゐけゐを
うゝゝよゐをれなんとゆゐゐゐゝでゐゐうゝくハ之文よゝ入るごとくひとゝべよく
まゝのゐうにゐゐをんとハゐゐども伸ゐゐをれゐそんとゐれゐゝびゐくゐゐゐ
ゐゐゐるゝきゆゐよをゐの系ゝきんをゐをゝゝやゐゐくゝひつれくゐゐ義ゐを
つけてゐくゐゐるゐゐゐゝにせんゐゝ

このくゝいひて「為なぐめつて」ゐるゐひごよゆゐりなく風ふゐさ
いて為こげどもく諸本
てゐゐひげどもくゝゐゐへゐごゐゐにゝごゐゐくゐゐゐく
ゝくゝうゐゐゐつゝゝゝうびゆゐるゐ系ゝいゐくゝゐ系ゐゐ

病床漫筆云万葉七ゐハ船多氣とゐ、
荒海の波をゐのぎて舟をこぎゐゐゐゐ
土佐日記ゐたげどもくゐゐへゐぞゐきゐ
ゐどゐきてゝゐゐゐも波をゝゝのぎてゐくゐの
退くなり」
万葉七
[illegible]取神ニ祝我鎮齋杉原燎木代
殆之國手弟所取奴
後撰雜三詞書云人のもとゐゐゐくゝ
なんゐゐるとゐひゐゐれバ云ゝ
拾遺意四
なげきてゐ人いるゐの　をけゐえ乃
ゐゐくゝくゝゐもなりよゐるゐ邪
ゐす今云ゐとくゝくゝことゐくゝ
真淵云ゐとくゝくゝゐをゐくゝくゝとゐゐる
同ゐゐをゐをゐハ危殆の字のをゐゐくゐをん
どくゐゐも同ゐ万葉又後ゐも殆をゐゐく
ゐるゐくゐゐ万殆ハ危ゝ近ゝ
説文云殆危也」
日本後紀巻廿四云弘仁五年九月戊子奉
幣明神報豊稔也
續日本後紀巻十八云承和十五年春三月壬申
勅奉充山城國乙訓郡山崎明神御戸代
田二町
又云嘉祥元年冬十一月壬申隱岐國伊勢
命神預明神例縁筆有霊驗也
漢書巻二十五郊祀志云使先聖之後能知
山川敬於礼儀明神之事者以為祝
梅窓筆記云明神ト云ハ式今二明神御守

ゐゐゐ神ゐゐまいの神ゐゐゐゐ

日本天皇詔旨トカリテ現在ノ天皇ナサシテ申ス事ニテ神ナサスハ名神ト云事ナリ然ル名ト明ハ字音ノ同キ故ニ通テモ用ヒタリサド差別ハアルベシ

續日本後紀承和十年夏四月丁丑山崎神預之名神トアル同紀承和十五年春三月壬申勅奉充山城國乙訓郡山崎明神御戸代田二町トアリ同神ニテ名神ヲ明神トカケル證明ヲ出ス仁和三年三月十四日賀茂明神春日明神トアリ此外ニ又台記久安三年三月廿二日壬寅春日祭大名神四座足カケリ後世ニテリテハ大明神大ドヲ被授ル事モアリ也

真淵云明神ハあきつ神あ〜〜神とそ〜〜そ頭神と出る拠ハ今顕ハ知ル事ハ天皇ヲトまると神を略神とのみ延喜式のこころ多の神ハ名〜〜変ミの略神とあ〜〜神とさきのあくべ〜名神とそ〜を略ス略神と書ハ略ス略ス又名ヲ略ス略ス〜〜と云〜〜ヲ略ス略ス〜〜と略ス略ス〜〜名神とそ〜ハ名あ〜神のみ多〜〜

魚彦云明神とあるハ嘉祥のころ既ありとそ〜〜〜續日本後紀巻十八ノ山崎明神又伊勢命神預明神例あどわれば明神とハ名〜〜〜のひとる〜

續日本紀巻十云天平二年冬十月庚戌遣使奉授海信物於諸国名神社

与事記云其底筒之男命中筒之男命上筒之男命ハ住神者墨江之三前大神也

袖中抄

ちはやぶる神のこころをあるうこに　の定

いまとてうえつるこのれいこく住の江の松ハ　定ナシ

そ〜〜ハ松なぞいの神あをあ〜〜ぶ〜〜〜〜

うつ〜〜〜〜

あくこと　いかをあくこと　ハあくこと　ゆとは
いかなり　めとうとたとつと　風をなり」
変ゆ云ふやうにいくく　せられある神気然
わくこ　ひとるやさ　きさゆやてあぐるる
ひまこ　ひよりひまくるやうの神ハあく
ぜとうかのか」

きいの神どうしゝく　傳法るあげくれど
らともゆハれ　たぐんこよあぐるのこ　いまくものゝ　真閑云神ゆまの
世めさて　ゆかこくまくまとこゝこの法のごとくゆく　拗法のこなくよいまめく
とあるとハこくろくこへるゆなれどもくハ因縁とんこそう　いふあこうひこ云
あかこのてりなれど　旋まるゆくうなまバ　諸年によりて　ゆきかゆ　いやふこ
よいやこちまこいやハ　ゆをつくいへるゆて　古事記よ　最をよこ　續日本紀よ　弥をよ
やるぐごとし　ぬさうハ　ゆんのゆうねバこゝハ　ゆこと　ゆれどもそれよハ　ゆんの
せうもとんこそて　風波もやまされハ　ゆあもゆうねバ　神惠よ　祈うれしく　ゆ
まうと　ゆや　こそやあとの　ゆをゆりく　ゆとゆとゆ　ゆとゆゆいこさこそゆあいこゆ
ちくうハそてまなとさくゆ　こゆゆる　ゆくゆゆ　ゆきこ　法をゆまうとこ
まなくゆもくくそゆこうゆれゝく　顔法ハうゆゆ　拗法よ　ゆえくう　標法よ　ゆこゆ

こゝ　うつつけよくこのごとなりゆれバゝく　事ゆゝうゆつけよくこゝ　ゝ
あくうゆあとゆゆくこと　を海よいるゆハ　ゆくて　海ゆくこゝれゆそのこと
風波ゆくて　ひくうこれゆくること　ちまゆ　ゆくゝうの　ゆをゆくけ　くう
ゆこつるハ　法の縁法なり
あくゆくうこゝ　風波ゆつまゆ　ゆくこくこの　ゆゆまゆ　ゆゆゆ　ゆゆゆハ
こゆけとのゆこと　姫松の姫とあくきよハ　ゆうハくうゆとなりさそこゆれ
第ハくあゆ　ゆ用なれど　姫松よむこへて　財をなゆるこくの　文よくくあゆ
ゆひんゆこれハ　文ゆくゆこくゆ　ゆくゆこくゆ　ゆゆゆこくゆ　ゆこくゆ
あゆうくうくハ　今くくくくくくて　姫ゆこゆ　法ゆくうくくくくう　因ト
ゆ閑の　法標法よ　あゆくゆこゆ　法ゆくうくくくくう　因ト
こゆあくて　風波ゆこゆまくれバゆこゆて　神のゆこゆこくくくゆ　ゆくゆ

延喜式雜式云凡難波津頭海中立澪標
著有舊標朽折者搜求拔去云云
袖中抄云をつくしとは川口などにくものすがた
和名抄云をつくしとは川口などにくものすがた
をのめも世俗よりをもをもをもといふをもとも
かくをつくしとをつくしとをもをもをもとも
をびきの糸とをもとも又水脉角云云
をつくつくしとも云国史には難波津より始て
澪標の由あり云云
年山紀聞云和釋云字澪標とかけど名の
意は水脉津蘊よりてはは助語也
拾遺別集書云師伊周つくしまうり
るは川尻をなれ侍りなるものとなる云云
散木集連歌
川尻よ糸のくものゝ長なる　後頼
一かの浦るこそさらく　後重
東鏡巻五云元暦三年七月五日今日豫州
至河尻之庚板津国源氏多田蔵人大夫
行綱豊島冠者等迎前途而發矢石云云

澪の鄙流なれば　こゝぢとうの中を作の中なかりなる云云こゝぢとうの
いなるをこゝぢとて澪を為かく風波をつまりこれば
をもとも同じことなり

ふなをつくしに沈りやどをいでて　雜波の津を
なにはよつきて
なにはの定釋
なにはの地人なり
なにはの定
なにはの地人なり
なにはの
なにはの地人なり
なにはの
なにはの地人なり
なにはの

めひとりこそちゐしゝしてとゐよあゝ　存ようの歌とをこのくなるべしゝ　巨勢ハ
地名いまと淡路しまハ源巨城をも地名ときこゆめばこさて女の名乃ちの名乃ちへ行く
いまとこいの名をつくる例あり古今に典侍　あまねいを後撰に内侍たいこけいを典侍
あきこしげのこ命ぬきよいなどゐを巨勢もこのこゞひの名なるべし　こゝもち
このくなりぬといふをこゝ名なりぬるとゐをとあれどるの字衍かゝうぬくゝち
なまバ定家つゝ外為家つゝ拾葉か類従か等などよりてもゞこゝ　いつゝうと
こゝひゞせりつるハんひとなりゝをいへども夷紀に恒をあゝ万葉に鬱とあるべ
きよりもあきこを形容ハしくハ古事記の傳よりえられバひゝきうをゞゐるべ
あこきをげてハわゝこゞさけてこ万葉十四に久左祢可利曽氣とあるもこの
けゝこゞきをげと同じて今ねうあさけこを一首のこハ土佐国を出せるか
いつゝうに歌わうにきこんとんひとなるわゝを今を歌枕江のあぬを

こゞきをげて出ふのこゝをてきこゝうゝよこ　いと思ひのあるゝ人のいへれバこゝ
もゝしゝるこゝこハ淡路の巨勢の歌をてゝきこゝるゞ思ひのあるこゝる
きこをもよふハ人こゝ是ゝゝるこゝ　こゝもゝ形をむふ名こゝもハ海之事記に
よあゝをこゝ地名をこゝてなどゐるゝ思れゞ歌をゝ例の紀氏こゝうこゝをいふるべ
歌をこゝこゝ地名ひゝ地名ハ仮名もあるゝ和とをこゝこハ今をこゝバ歌をこゝうゝ
今川風よりこゝるゝうれゝさにこゝこゝよんゝなりて思ひのあにゐゝもあゝ又
こゝうゝきなどもあ歌をこゝうゝあゝあゝ

七夕　定家

川風よ舟いのゝを絶てこゞさのゐるに
川のゝひてたなゝこゝゝゝふあゝのゐるこゝいと
こゝゝゝかゝるあひゞこよ舟を沈着ひとゝ為のゝこゝ
こゝちゞゝゝきこゝこゝゝゝのあとゝこゝゝよとゝゝ

源氏物語云こゝふゝこゝちゞ
ゝく地名ゝえ淡路ゝるもこゝるゝこゝなりゝ
契冲云これハ歌をどゝるひゝ歌ゝぬを
いへゝゝ

古事記云歌曰阿佐比那怒波良許斯那
豆牟蘇良波由賀受阿斯用由久那又入
其海鹽而那豆美行時云
書紀仁德紀云那瑠波譬苦須濡赴泥苦
羅齊許辭那豆涕曾能赴尼苦羅舛
於朋涕赴泥苦社
万葉七
白栲尓丹保布信土之山川尓吾馬難家
戀良下
同四
如此為而哉猶八將退不近道之間乎
煩恭来而
源氏著紫
いつかはるきさらのひとこゝろきこゆ
ありしのようなづむこゝろえなくぬ
同ゑと留云まことよこの忘なづむこゝ
なるこゝろむづかりあるこゝろまひつゝ
蜻蛉日記云ゆるうせなどせさせ給へ
いろづくる菓のかなづくてこゝてるを
えれバとうなくくてゝ

ざりし菓このくまどども清海の定十二
うゑこぼうよりそ為ハ為イ
弱和紫いづもりの為
ゑをみてハ為
ゝとゝとそて川の為イ
まづもなづむ為イ
ゝ地扶イ
ゝ為
ゝ為
ゝ為

延喜左馬寮式云凡諸節及行幸應用國飼御馬者勅畫須數奏聞乃下官符令進唯牧放飼馬者寮移當國國郡令牧子牽送（但根津国島養牧豊島牧不移當国寮直放擊）

大和物語云亭子のみかどきさいの院より地りまゐりたりけるに大江の玉ちかもあるあるときどもの人のあるまゝにあひぬれば

うちかへしてかくなん

狩衣一下衣大式のかたいまとりうひかぶ

不ふるくりなるを地りまゐりぬ〳〵人云々

つぎの文はられはやまひをそれば人のあるなるべしとおもへ　とくとおもふをいうでらく

来へうへんとおもふものをとく津となるやまもハとおもふなるのかはかぎりとく

の海をくをれの藻さまうけくるも　あハぢのごとくをくて玉を稀てとおもへ

そは大和物語より伊勢のごとき後のごとけのと外のご家のご修徳のごひがきとど

うつぎのて宮より少なのご續世継よりくをんのごなどありとの外あじてうどへかこ

れ女の物なり　あハぢのごとくをよりわりてきはぐらまくものをとをくこの

文物をもうつ〳〵誤字脱文などあるをひて考あるよりかをねてきこ

あるをもかくもせバこの文よくきこえぬ異本にて地をもりねうこ

ざるまゝあるをもとらもつるれと物ひこうは地をもうかこ

ハはなかりけるなかりにながくとうのひのこ鳥養教と

ところ定

いつ保ところるよ　とぐのるイ

ぬるこをあるまい孔やとのひ

古事紀云當四月之比向於其河中之礒拔取御宴之系人飯粒為餌釣其河之年魚云々

書紀安閑紀云大伴大連金村從高天原使大伴大連開貝田於縣主飯粒縣主飯粒慶悅無限云云

和名抄蘆類云肌目病源論云肌目（加乃乎乃目也）

新撰字鏡云疣贅黑子雖也田止保多世說德行篇云陳仲堪既為荆州值水儉食常五盞盤外無餘肴飯粒脆落盤席間輒拾以噉之云云

孝子伝云伯牛しもつるとい拾つるこのわざらうなるといつよ飯粒なともあり　なるべしものを粒とをとりてこうるをにさが

なるを男どもをとめ拾ものをとりてこうるをにさが

第中て拾つるとざれのひるとあるこや

のかハやはあるなるなるべし

真淵云飯糧ととも第をもて魚をつるとも

いとのぬはををみうるる及第あるをとろ

うるハとひをうにいををとをとうれるなり」

ちくくなるやもあるる人諸木

いつくこの移るあるもて

そうへまごとをとをとこどもひそうの

飯ひがくもてるもやこうやうあうあ

つるる定為

ひがくもてるもやこうやうあうあ

ちいつ為

ちくくなるやもあるる人諸木

いつくこの移るあるもて

そうへまごとをとをとこどもひそうの

飯ひがくもてるもやこうやうあうあ

つるる定

飯粒とのひびきなどにあけぬるうるあるをもいひびきとあり　播磨国
の郡名に揖保伊和とあるも飯粒のことなるべし　腫物の肌目を和名抄新撰字鏡に
ひびと訓せるも飯粒に似たる瓦の名なるべしさてこれはあぐるに魚をもて
ふ事なりこれば飯粒にて魚をつくることなりとなどこれもひとつにたはか
ましいなりこの神功皇后の飯粒にて年魚をつくるまひしるすなどもひと
つにてなるべし　うゆうのことにてあり云々うゆうのくすのことなるべ
よあれど略してそもそも正月十日の条にこのふつうなり　親に物をくれば
ものをとうけくれぬとあるをうけとるべし　うゆせちこれば魚
もひびきにくせちに正月十日の条にうゆ精進なれば魚をこれ魚なり
九月にうゆ　なきみあげぬるうゆをひきつてのぐ
まもとも川のうゆあるまじばねぎあるよのぐそねぎるこれ

邦冲云ひとなどにあけぬるうゆあるをもいひびきとあり
のぐとどめとあるべしまこあけぬるうにて
菜どこあそあをひとこのぐるあり　貫之
集に友の花咲ぬるをえくほとぎす
まぐなるぬるうゆまるべうなる
入江昌喜云うゆ舟虚舟二人もの〳〵ぬ
るとあるもこれ〳〵ハ語なりこれまこしく
貫之とてのその船人ものまるあ
次の船とかくてあもあきのぐるまなぎさ
のあるをえつもくとるをえ人を
あるをもあるべし　是日読の儀なり
うゆとあきにあけぬるうゆをひきつと
あるべしあけぬるうゆぬるの船あり弁内侍日
記云ひまぐるあけぬるうゆうゆあるあ
りのうゆれものを時さる間とあるべし

万葉六
濱清浦愛見神世自千郡湊大和太
乃瀬
大本廿五　左近中将具氏卿
松のうゆこのうゆにうゆひあるくく
きあるうゆの長をいざうゆ
季吟云あがれのもとハ人のあさ
うゆうゆちまうゆあるべし一本贖のもとと
あがれいがれ低名のぐうゆをうゆまひて
文字をけるあ来高ものあるなり
もといのもとうゆ
真淵云退散をまもあがるなどいへを
あうゆうゆあるべし
上田秋成云れ津国に生れうゆとの
あうゆの地理ありさハあうゆうゆれど
この鳥養より東北のうゆに今もうゆき
あがれうゆまうゆ和田の泊とあるハ海船の泊
もあれあるべしこの川船いかのまれ
船をうゆあるあれなしあれのあれハ列の船
河内志云交野郡渡瀬院村

古今集目録云惟高親王文徳天皇第一
皇子母後四位上紀静子西位下名布女
四位宮内卿天安二年正月廿二日任太宰権
帥同十月任帥貞観十四年七月出家
十五年二月廿日薨号小野宮云々
大日本史云寛平九年二月薨時年五十四
拾紹運録源氏系図共曰貞観十五年二月

あひびとよ和田のとまりあがれのとまりといふ
贖のもとイ
夢「は為」
菜魚なぐさへば松ものつくく舟ひき
松をなひつ為
のぐるよなくくさの浪といふ為
浪もう浪島ひあるとうゆ
どこうゆ為
なの為
まへ為
なのあるうゆの色さるこうよくくいく
こうもむ為
こうもむ為
こうゆ為
故惜
為
坂為
在原業平
古今巻十
伊勢物語
なりせば
古今伊勢為
なりせば
なりせば
なりせば

歟二十六歟然換三代實録十六年益封則
二書誤今姑後伊勢物語闕疑抄ニ

古今春上　なぐさのの院の桜をよめる　在原業平朝臣

世の中に
伊勢物語云むかし惟高のみこと申すはしまべのみこ位あり　なぐさの院の桜
せとの内に宮ありけり　その宮の
おもしろかりけるを　その宮のうちなる人をつねに
その桜の花の下にむれゐて　のみくらしてけり
その桜の木の下にいとおもしろくさかりなりけるを
かれがその人の名をもしらずなりにけれど
なほ　なぐさの院の桜とぞいひける　とぞ
世の中に
たえてさくらのなかりせば
春の心はのどけからまし
とよみけるとぞ　又人の
ちれば
をしみ
うきものとなりてはかなくてやみぬべきものなれば
万葉六
一松幾代可歴流吹風乃聲之清者
年深香聞
李昌詩集卷三云岸映松色寒石分浪花碎
歐陽修集卷云龍咆虎嘯松風寒

続後撰雜上　貫之土佐の任なりける時
なぐさの院の桜　藤原為時朝臣
ちるを見てよめる
ちるとてはかなくいとへどいとへどなほ
春のうきものとなりにけるかな
続後撰雜上　藤原為時
ちるとてはかなくいとへどいとへどなほ
春のうきものとなりにけるかな
ちるを見てよめる
ちるとてはかなくいとへどいとへどなほ
春のうきものとなりにけるかな

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今大事所

新拾遺羇旅　中納言家村

朝野群載巻十六石清水八幡宮略記云右行
敬恒時欲奉神大菩薩爰以去貞観元年
恭拝豊前国宇佐宮一夏九旬已畢欲歸本都
之間以七月十五日夜行敬示仰宜吾深感應
汝修善須近都移坐鎮護國家嘉同廿日
上京八月廿三日到山崎離宮進同廿五日夜示宣
可移生之處石清水男山云峯也中略録上件由
恭之公家令奏聞矣同九月十五日下勅使令
實檢點定次宜下本工權允良基令造六宇
實隈已了
貞観五年正月十日建立天安寺傳燈大法

師位行教云云の外石清水八幡宮の事八
三代實録類聚國史其外あまたあるなかに
もとどろくなり
續日本紀巻三十云延暦三年七月癸酉仰阿
波讃岐伊豫三國令造山崎橋南材
水鏡云聖武天皇神亀三年行基菩薩山
崎の橋をつくりたまふよし法會をまうけ
供養したまふ云々作者部類にも
見えたり
三代實録巻十三云貞観八年十月廿日辛卯勅
山城國乙訓郡相應寺者元是淀高比屋
之地也往年擢僧正壹演泛水觀行橋
頭遣天暑熱上岸風涼有一老嫗避舍
廡地壹演便在其中卿作壇法雖平地
中得舊佛像因緣相應靈瑞顯現太政
大臣勅其希有奏聞遣造場即發工夫怒補
輸送宮寺名以為相應宜賜四封永為
寺堺東至橋道南至河岸西至作山北至
大路云云
万葉三
水浪磯起道有能登滝河音之清左多麻
通瀬毎か
同十七長歌
奈伎佐か波岡之賀毛佐和伎佐か射礼奈
美多知底毛為底安ゑ
和名抄水部云泊泊唐韻云泊泊淺水貌也
文選師説左
左良奈三

こてよ相應寺のわとるもよ志ぢし
あをとゝあくとのく
さぐ　むるまつ
ゆ　ゆ
ゆ　ゆ
ゆ　ゆ

後撰春上　きのもとの

[illegible]

曽丹集

[illegible]

類聚國史巻卅二云弘仁四年二月己亥遊獵于交野以山崎驛為行宮云〻

同五年二月己未遊獵于交野日暮御山崎離宮云〻

帝王編年記巻五云仁德天皇十一年十月掘難波江築茨田堤今山崎河通海是堀江也云〻

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十二月　[illegible]

[illegible]

山崎の山城國乙訓郡なり　[illegible]

十三日　なし　[illegible]

なし　山崎よりあり[illegible]

大和物語云さうもくこきちがやはらしてはるのはらのはるのはるのはる

泉の人はいでいりまぞといふ事もあり」
古事記云西方有熊曾建二人是不伏无礼
人等云
又云百官恭敬往来之状既如王子之坐所云
李時云ゆくゑとはうゐ〳〵しく礼義のそなはらぬ〳〵妙壽院本和名抄直讀の字誤
なるべし
谷川士清云ゆくゑ真名伊勢物語ゆくゑ
実用とゐゑゑゐ
ゐゐゐハ敬礼をいふやうハ
解し実用ハ実目の誤りゐやまあとゐゐ
べし又おゐゐも同書よりゐゐくといふを
懸なるべしといへり

事よ守の籠中にあるゝ〻のくちびとゐるに拝ト　このゐるゝのまゐゐる
のゐゐをゐるまゐこのゐるゝハ歌の主人をいふまゐゐるゝのゐゐと、警蹕のよ
ゐをいふ泉ハゐるゝの人をちびのまゐうへよまゐ食ゐゐよりれば〻ゐゐと
うゐて拝をゐゐうゐゐハ椿説よゐハゐをハゐゐ〻ゐつゐゐ〻ゐをいへるゐる
べし　泉の人はいでいりゐゐげなゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐハ系ゐいゐ〻ゐと
ゐまゐゐ中ゐの名ゐゐ〻ゐ帳ゐのゐゐびなゐゐゐ〻ゐれば泉ゐゐ〻ゐ捨ゐゐ類往
ゐゐゐよりてゐ〻ゐむゐてゐゐゐのゐゐハ礼ゐてゐゐハ人へつけゐる酒ゐて酒を形容
〻〻ゐ〻ゐ〻ゐゐてゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

拾遺抄名　まゝり　ゐ人一〇

[illegible]

[illegible]

附注云まゝりハ餅ゝ関東ハ餅をまゝりと云

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

諸國奇遊談云八幡宮の北社寺門のまへ

[illegible]

[illegible]

賀茂下賀茂などの大社ゆゑ今もまゝりの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

今ハ見世のまゝ中古見世ともいへる見世棚の古圖ハ是がゝる鏡ゝとゝ畫巻ゝ

なりこの圖ハ是が友君瀬醒が骨董集ゝそゝるべゝ　小槌の繪もゝ

真淵の説ゝちひさき槌ゝ法をゝきてきのそばゝ物ゝうゝ

[illegible]

その圖ハ諸國奇遊談骨董集ゝゝ

[illegible]

なるべゝさてその環餅（マカリ）を法螺貝のくちもつゝくるをまゝりのゝのうゝ

いつゝるべゝこの環餅の圖ハ菱井良幹が集古圖ゝ種ゝの圖をゝせるゝ中ゝ法

螺貝などの形ゝ似るもあるべゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

名あるもゝ[illegible]この社

[illegible]

禁秘御抄毎日供第云女房御揚枝二雙

指御簾[illegible]

落久保物語云[illegible]

[illegible]

徒然草云久我相國ハ廢上ゝ水をゝ[illegible]

主殿司主器[illegible]

[illegible]

徒然草野槌云貝ヲスリテ作レル飲器ヲマガリト云ゝ

山城名勝志巻六云鳴坂土人云向明神南町端石塔寺南有小坂此所也

續日本紀巻三十八云延暦四年三月戊戌御鳴院宴五位已上及文人令賦曲水賜祿有差

禁秘御抄徒然草ゝゝ[illegible]　小槌の法もま

[illegible]

小槌の法も環餅（マカリ）の法螺貝のくちもゝ土佐の國ゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山城名勝志巻十引山城風土記云月讀尊受天照大神勅降于豊葦原中國到于保食神許時有湯津桂樹月讀尊乃倚其樹立之其樹所在今号桂里

古今憲四　　[illegible]

あをう川　淵ハ影よりなる世なりけりと　[illegible]

[illegible]　初そん人をもとめて

同雜下　　[illegible]

世の中ハ行つゝなるあとう川

[illegible]

同雜下　　伊勢

[illegible]

新千載秋下　　山階入道前左大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

知るきこえてあるべし　あまびものこゑあまたもハ天まをとをるゝとゆゑん　桂河のこゝとて

一そのゝゝハ土佐国ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　天まをとゞろくをるゝに　ゆゑ　ゆゑ　川なれど

今うく世をゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

真淵云天まをとゞろくとあるはあの山ひかりゝれバもるゝなる月のこゝろと　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

知ることをしてをるゝとゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

こゝびのあるゝこゝろがあるこゝびのふるゝれバ川のなゞれも　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

あをゝをしてさよ云く　あをゝこゝをしうれしさよあもあまりあるまで　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

あけくるまバ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

うけるこゝらのとゝをへて　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

長暦世界ゝ云式人云貫之がもゝ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

もゝくるる歌のあるハかての歌　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

さゝとゝゝ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

真淵云受領よせくゝまをみなゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

人よあづけはきをもくなどゝもくゝ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

をぶこゝるゝりなり　受領のえらの　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

といへどもさるゝのことなるをあ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

竹取物語云かぐや姫いをくることだに

なのゝこゝあひをやのゝこゝよをる人どもの

さくよいとまさなーゝ

宇津保義開上云ゝるかどよもゝの休

むのゝまうをもこゝあひてこゝるゝ

なるこゝたゝ云

栄花つゝゝ花云れるゝのゝこゝりをこゝだ

うにせこゝせたゝあひてうゝゝをこゝくせこゝ

たゝゝ云

真淵云のゝくゝあをてこゝるゝなどこゝをゝうこ

いこゝせゝゝをこゝをゝうゝの人ゝゝこゝけハこゝくく

こゝゝゝれゝゝとなゝの歌をあつゝゝ人の

ゝゝくこゝゝゝゝれどこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あゝけくまバゝゝこゝをばせんとなるべし

為ナシ　やゝづしれきる歌ゝあづけこゝゝつゝゝ人のゝゝをあゝ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

たるなゝ歌ゝゝゝなくゝ陸ゝゝをあゝ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

なれバ為　なゝゝゝのゝゝゝてあづゝゝのゝゝるなゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

裏詞云舟人ハ舟よのりてきこゆる人
なるべし
土田秋成云舟人ハ舟のりて有り人なる
べしと云但歌きこえがたし かく舟人と
のひて八一とくり 舟士等のりよきてな
さるれどあまりの狂りこ人との業ふや
らの紀氏文芸あまりよ言をもぶきこゆる
やうなるがところぐまあれバこもしら
ぬうちをくあ〜んも

とをよこの〜伊勢ていのぐバこの狂しよ舟人もこなるおいた
うを定
ぐきてのしるうるうちになるわこの狂しきを定ましたへ
ぐしくをそうにんしまを舟人といへ扶りるうこ
こうまあ狂しもの〜〜ぬこのをもがやどよ小松乃
あるをうんをがかが狂しさとぞいへる扶注なかあてうぐや
ひの〜んまこなん
えしんをの定狂ちとせよみまこのぐいこわくこうかな
しきこのまこせまやこれぐこくらちをこさ
こやこ狂わこうしれどえつくさぐとこあまこのくまれとく
遣妙
やりてむ

彩よいこうてきく紀氏の家れすハ長明無名抄よりぞこう標注よあげるがごとし

後撰雑二
やれバをしやねバ人よえをぬべし
なくくもあかつをまされも
枕草子云人の やりもてこる文をうるに
狂れどつぐさあまこうつけくるをく
模注三上云りらうどやりわぐをうん
あひて云

文章氏任国のあひだる部もおもてきまし〜書そこしうどこそしうもまこよそおまこ
ちそ〜ともこをあづけうつる人のんをおもこるなりるもくおよ部のあれある
るをうひてさそくあれこ部をあづけうし人のんれあをもそて体器なりし
ルどとこ なの語をあるもこの部れやうなるバのどこそあづうれるこをなるの
語を中をべそこる語をいてこのあをあづけまうし人ハとなりあそ中狂を
あまどをと一つ部のあうなれバづくうれあづくうんとのどこそあつうし
とこされバ後ぬをもあるあることよ部を後後せん狂も狂うくうをしをこうく
わしこそこるるよこと このひうるるをとうをどうよ狂もひをせバをこうを
どうハをるなるこそうをれをハのくれどとく部をあづけうし人乃体器
なあ〜狂よこうく部もあれこそこるバ後者どもの狂こよいるをさをどうをし
どう部をあづけうし人のなるバこうひハうるをとをこよいそせバとこ

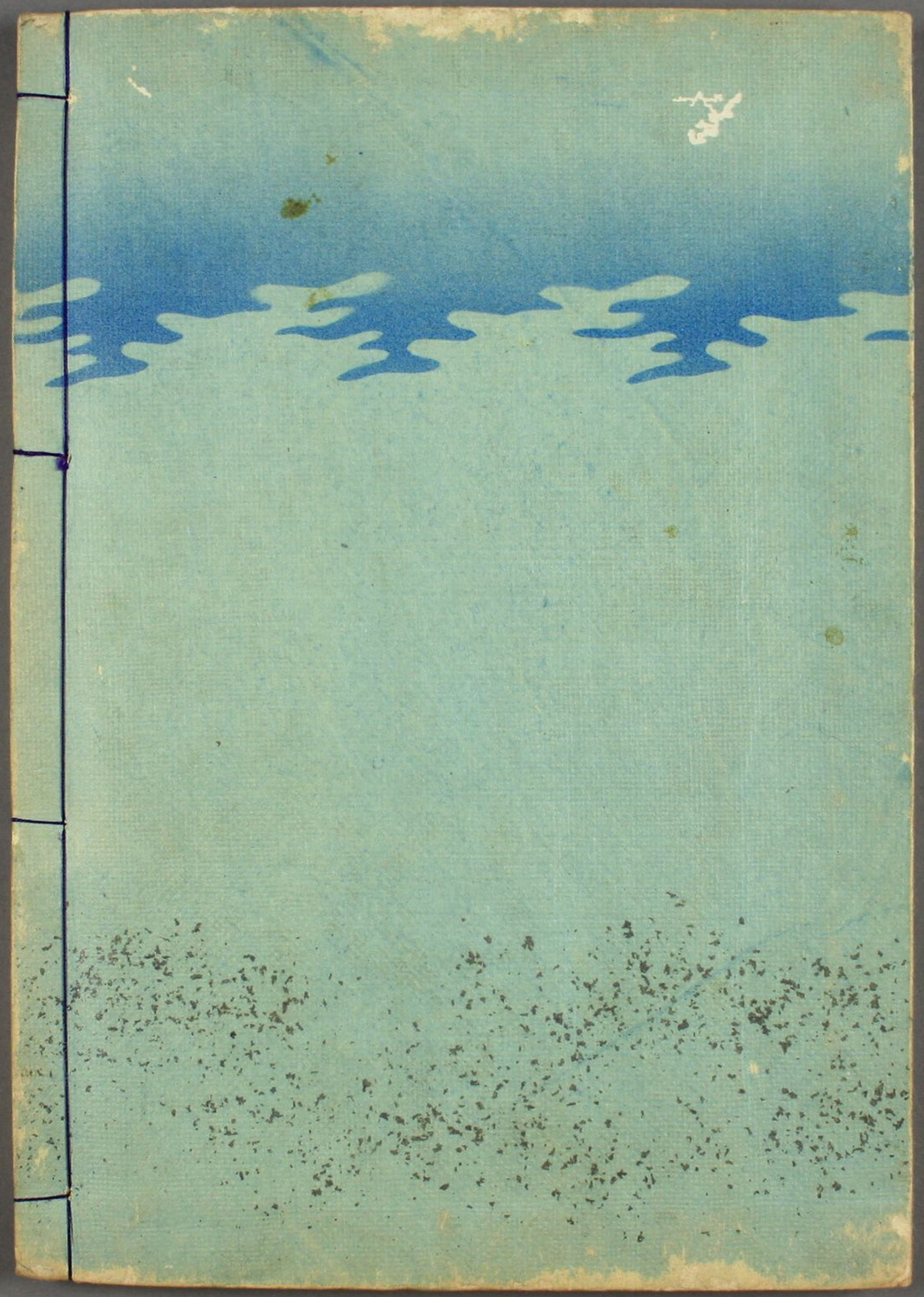
いとハつ〳〵くゝ[illegible]れどまくいとハのハりゝん[illegible]ゝ術なるべし異なよいとゝ
なくさもわまど異なにありてゝうちぶぶ人のくゝひあくんすを拾ひてすと
のまくゝもて拾ふうつさそてのくゝとハのくゝ象をもあしそそくれバいとつしとうへど
されどさもゝがよ久しく象をあづけしゝのなまバをのくゝりごとをバせんと
さて洗めてくゝびもりゝあづくる事ありわとりよ松もありくゝまむしハ洗ゝ
しゝ松なれどわくゝもそくゝまバくゝさ拾ひなとしくゝるゝ洗めてくゝわまりくゝ
づけまりくゝ[illegible]とゝハあまハてしくゝくゝをつくゝいくんそくゝかけくゝる
文年六年ばくゝびよる年やゝさくゝ延長八年土佐國よくゝりていま兼平
五年なまハ第後六年なりくゝまバをせゝとせのくゝちとハいへる十二月廿一日の筆
ぼくゝせをゝせくゝとくゝるをゝそもゝをゝべしくゝそ洗のゝくゝりにあり松も文年よ
あひごくゝくゝと[illegible]ゝくゝるくゝとせもゝをゝぐしゝやくゝにゝくゝるくゝと いま拾ひくゝるぞ

まゝじゝもくゝるゝく松のゝまよいま拾ひくゝるゝ松もゝまゝ出くゝくゝとハくゝにくゝりくゝるゝ
いくゝんくゝそくゝまくゝこくゝまくゝのくゝくゝくゝ

土佐日記考證下終

東京 北畠千鍾房
書肆 須原屋茂兵衛
日本橋通壹丁目

製本所
北畠千鍾房記



岸本由豆流著

土左日記考證

東京出版 千鍾房
金花堂梓